

MfG\_J\_Saionji\_and\_Ohkouzu-bunsui

## 西園寺公望と大河津分水

西園寺公望は、最後の元老として知られている。元老とは、明治から昭和の一時期、特に天皇から指名された、国政の最高顧問を意味する、法に基づかない、憲法外機関の人たちである。大正末期には、山縣有朋ら他の元老が次々に亡くなり、元老は西園寺公望ひとりになった。

公望が国政に関与した時期は、日清・日露戦争を経て、太平洋戦争に突き進もうとした軍部勢力拡大時期に一致したときで、政治の側から、軍部の暴走を押しとどめる毎日をすごした後半の人生は、長岡をガイドする立場として、山本五十六の反戦への尽力が及ばなかった無念さに似た思いがしています。それはそれとして、ここでは、多くの政策推進のうち、大河津分水建設に関わる人々を、武石弘三郎、長善館人脈を含め、新潟との関連に限定して、まとめました。西園寺公望という大政治家が、大河津分水建設はもとより、新潟、長岡に、多くの関わりをもったことを知ってもらいたいと思います。

### 目次

#### 1. 西園寺公望と大河津分水 年表

#### 2. 武石弘三郎、長善館人脈を含む、新潟との関連の詳細説明

- (\*1) 戊辰の役、越後戦線
- (\*2) 新潟府知事として
- (\*3) 教育への関心
- (\*4) 「北陸治水策」、「新潟治水会」の要望
- (\*5) ベルサイユ条約帰朝後の私邸

その他 撰家と清華家、悠久山に星野嘉保子の銅像が建立

#### 3. 北越御陣中日記に見る、西園寺と北越戊辰戦争の概要

参考1. 近隣の武石弘三郎作のブロンズ像、大理石像

参考2. 西園寺公望に関わる武石弘三郎作品

関連する内容として、以下が、あります

MfG\_J\_Sculpture\_of\_Takeishi\_Kouzaburou\_in\_Niigata

MfG\_J\_Chozenkan\_and\_Nagaoka

## 1. 西園寺公望と大河津分水 年表

※日付は明治5年まで旧暦

元号年	西暦	西園寺公望 年譜	概要 (*1),(*2)等は2章で説明	大河津分水関連
嘉永2年	1849年	10月23日、清華家の徳大寺公純の次男として京都で誕生。		
嘉永3年	1850年	公望と改名		
嘉永5年	1852年	西園寺師季の養子となる。		
慶応3年	1868年	12月、官軍参与を兼帯。		
明治元年	1868年	明治政府の山陰道鎮撫総督	政府の軍事高官	
明治元年	1868年	北国鎮撫使、会津征討越後口参謀に異動。	(*1)	
明治元年	1868年	10月新潟府知事に異動。	新潟府知事(*2)	分水工事請願を受ける
明治2年	1869年	1月新潟府知事を辞す。7月正三位権中納言を返上。和親王に就任。	4カ月、新潟府知事	
明治3年	1870年	12月3日、官費によりフランスソルボンヌ大学留学。	10年間、フランス留学	
明治13年	1880年	10月21日、横浜へ帰航。		
明治14年	1881年	11月政府官僚に復帰。	官僚、外交官時代	
明治18年	1885年	駐オーストリア＝ハンガリー帝国公使、		
明治22年	1889年		星野嘉保子、女学校創設	
明治24年	1891年	9月4日、帰国し、賞勲局総裁に就任。	政府の要職	
明治29年	1896年	外相、文相両大臣を辞任し、仏で教育制度や軍の内閣	教育制度や軍統制を研究	1895 関妃事件
明治29年	1896年			横田切れ
明治30年	1897年	10月5日、帰国		
明治31年	1898年	1月12日、第3次伊藤内閣の文部大臣として入閣。4月3日	閣僚、枢密院議長	
明治39年	1906年	1月7日、内閣総理大臣に就任。第1次西園寺内閣、文部大臣	第1次西園寺内閣	
明治40年	1907年			大河津分水施工決定
明治41年	1908年	7月14日、内閣総理大臣を辞す。	(*3)	
明治43年	1910年		(*4)	大水害、治水会・建白書
明治44年	1911年	8月第2次西園寺内閣	第2次西園寺内閣	
大正元年	1912年	12月、内閣総理大臣を辞職	総理大臣を辞職	
大正8年	1919年	1月パリ講和会議全権。渡仏、7月まで滞在、8月帰国。	(*5)	
大正10年	1921年			大河津分水 初めて通水
昭和6年	1931年			大河津分水 第1期完工
昭和15年	1940年	11月24日、薨去。特旨によって従一位追昇。12月5日、		

## 2. 武石弘三郎、長善館人脈を含む、新潟との関連の詳細説明

### (\*1) 戊辰の役、越後戦線

竹山屯、西園寺公望付きの従軍侍医として、公望の越後戦線に同行した。1月3日、仁和寺宮嘉彰親王を征討大將軍に、続いて三位中将西園寺公望を山陰道鎮撫総督に任命し、西園寺公は5日、山陰道に向けて出陣し、播磨、松江を平定してから5月初めまで、大きな戦にはならなかった。5月2日(6月21日)、小千谷慈眼寺会談決裂で本格的戦争に突入する。八丁沖の継之助率いる長岡城奪回作戦に、西園寺公望も山縣有朋とともに窮地に陥り、当時越後平野は大洪水に見舞われ、かろうじて避難。この洪水の体験は、西園寺公望の記憶に、深く残ったと思います。長谷川泰は長岡藩藩医。 長谷川泰像は、大正5年。竹山屯像は、大正15年。 同年に今井藤七像。高橋竹之介は、新政府軍越後参謀として、西園寺公望、山縣有朋の傍にいたはず。 長谷川泰、竹山屯、高橋竹之介は、みな長善館で学んだ。

### (\*2) 新潟府知事として

新潟府知事になった西園寺に、新発田藩が大河津分水建設を訴え、西園寺は政府に打ち上げたが、政府は動かず。公望のあとも繰り返し多くの請願が出されたが、採択に至らなかった。

### (\*3) 教育への関心

1895年に西園寺公望は日清戦争で得た賠償金をもとに第三高等学校を帝国大学へ昇格させる運動を指導し、1897年6月18日に京都帝国大学設置に関する勅令が制定され、京都帝国大学が発足する。西園寺公望は立命館のもとを創設でも有名であるが、このあと、女子教育の普及にも尽力するようになり、そのひとつに長岡の星野嘉保子への関心。市内唯敬寺本堂にかかる公望直筆の「以成肅雍之徳」の揮毫の年は、「戊申秋題長岡女學校」と宛書に書かれておるように。戊申・明治41年(1908年)と思われ、西園寺内閣総辞職後の秋ということ。明治41年(1908年)は、星野嘉保子歿後4年です。



写真は、2015年9月からのNHK朝の連続ドラマ「朝がきた」の実話モデルの、日本女子大学創立に関わったころのもの。放送期間平均視聴率23.5%は、連続テレビ小説として今世紀最高の視聴率を記録した。

建設中の日本女子大学豊明館前にて(1905)

後列左から成瀬仁蔵、広岡浅子、村井吉兵衛、塘茂太郎

前列左から、久保田譲、森村市左衛門夫妻、大隈重信、西園寺公望

#### (\*4)「北陸治水策」、「新潟治水会」の要望

横田切れを機に、大河津分水の実現をめざす運動は再び活発になった。有志による新潟県治水会が組織され、新潟県会は信濃川治水、大河津分水の実現を求めて、内務大臣へ建議・陳情した。

中之島村(現長岡市中之島)の高橋竹之介は、明治30年(1897)、政府の有力者山県有朋、松方正義両者にあて「北陸治水策」を書き建白。「治水策」は、近年の洪水は水源地長野県の山林の乱伐によるものと断じ、大河津分水の利を唱え、すみやかに県債を起こして開削すべきことを強く訴えた。

更に13年後の明治43年(1910)、新潟治水会の名で、県会議員一同が「大河津分水工事短縮」の議を政府に要望。

大竹貫一も、明治27年衆議院議員に初当選以来、34年10か月間、国会議員として活躍したが、とりわけ刈谷田川改修や大河津分水の治水事業に尽力した。彼も、長善館で学んでいる。

さらに、ここには記載しませんでした。この他にも大勢の長善館で学んだ人物が、大河津分水建設運動に関わっている。

(\*5) ベルサイユ条約帰朝後の私邸

帰朝の前年、1918年に、武石弘三郎は、西園寺公望像、池原康造像を製作している。

二度の首相就任と退任の後、大正5年(1916年)、西園寺は正式に元老の一員となり、第一次世界大戦終結後の講和会議などに、政府政策に大きく関与している。大正8年(1919年)1月14日出港、8月24日に東京に帰還。このとき締結されたベルサイユ条約により、日本は山東半島の旧ドイツ権益を継承し、赤道以北の旧ドイツ領南洋諸島の委任統治権を得ることになる。西園寺公望像は、洋行中に建造されていた駿河台の新邸に作られた。西園寺公望は偶像崇拜を嫌い、ほとんど自分の彫像をつくらせなかったため、貴重であったはず。

大正七年(1918)に製作され、大正八年、公望が海外の重要会議から東京に帰還し、洋行中に建造されていた駿河台の新邸に入りました。そのときに新邸に設置されたようですが、まもなく発生した関東大震災により破損したとのこと。

その復元石膏像が作成され静岡県の寺院に設置されておりまして、(\*3)に述べますように、近年、その存在が知られるようになり、そのレプリカが製作され、立命館大・朱雀キャンパスに展示されているとのこと。

その他

摂家と清華家

摂家(せつけ)とは、鎌倉時代に成立した藤原氏嫡流で公家の家格の頂点に立った5家のこと。

(近衛家・九条家・二条家・一条家・鷹司家)

清華家(せいがけ)とは、公家の家格のひとつ。

最上位の摂家に次ぎ、大臣家の上の序列に位置する。

大臣・大將を兼ねて太政大臣になることのできる7家を指す。

(三条・西園寺・徳大寺・久我・花山院・大炊御門・今出川)

江戸期には広幡・醍醐の両家を加えて数を増やすこともあった。

摂家と清華家の子弟は、公達(きんだち)と呼ばれた。

悠久山に星野嘉保子の銅像が建立

悠久山に星野嘉保子の銅像が建立されたのは大正十二年(1923)、  
星野嘉保子像脇の「以成肅雍之徳」石碑が建立されたのは  
昭和十一年(1936)とされています。

### 3. 北越御陣中日記に見る、西園寺と北越戊辰戦争の概要

西園寺公望と北越戊辰戦争 一付:濱崎直全「北越御陣中日記」について一久保田謙次、立命館大学西園寺公望記念館(2017) を参考にさせていただきました。

『北越御陣中日記』は、北越戊辰戦争に従軍した西園寺家家臣(侍従)諸大夫濱崎和泉守直全の陣中記録である。

慶応4(明治元)年正月3日新政府軍と旧幕府軍は鳥羽伏見において交戦、戊辰戦争が勃発した。

正月4日西園寺公望は山陰道鎮撫総督を命ぜられ、5日、軍勢を率いて山陰道に向かった。

その最初の宿陣が亀岡馬路村で、中川・人見両姓が西園寺の陣に参じたことにより、のちの西園寺公望と中川小十郎および立命館との関係がここに生まれた。山陰では大きな障害もなく各地を鎮撫し、最大の問題といわれた松江藩も鎮定して、3月27日に帰京した。

しかし戦火は東日本に広がり、新政府は山陰から帰った西園寺公望を閏4月5日に新政府は西園寺公望を東山道第二軍総督に、続いて同4月23日に北国鎮撫使に任じた。

24日には三等陸軍将に任じ、奥羽征討越後口出張を命じた。公望満18歳。

慶応4年5月10日、西園寺公望は御所公家町の本邸を出陣。

軍法局に出頭し、続いて御所に参内して天盃・太刀を賜わり暇を言上した。

その陣容は、諸大夫濱崎和泉守らを始め、薩摩藩兵など100人。

西園寺公望はイギリス商船を千両で借り

5月21日に敦賀港より出船、三国を経由し船中で1泊したのち、

22日に直江津今町港に到着した。

西園寺公望一行は港に近い福永弥兵衛本陣に北越最初の宿陣をした。

現在の直江津郵便局の地。

高田に陣営を置いていた北陸道鎮撫総督高倉永祐(ながさち)の使者が出迎え、5月19日の長岡城落城を注進した。

-----  
新政府軍は直江津に上陸すると今町一帯に陣を張った。

薩摩・長州兵を中心とした先発隊は閏4月16日には到着していた。

新政府軍は閏4月17日、高倉永祐以下、参謀黒田了介、山縣狂介(のちの山縣有朋)が高田に入ると、寺町の極楽寺を会議所にして北越再攻の態勢を整えた。そして閏4月21日には長岡城への進攻を開始した。

北陸道鎮撫総督高倉永さちと副総督四條が越後再攻のため江戸から今町に到着したのは5月7日であった。  
続いて北陸道鎮撫使越後大総督西園寺公望が5月22日に宿泊、その後7月9日に会津征討越後口総督仁和寺宮と参謀の壬生が北越に入り宿陣した。

-----

5月23日西隣寺公望一行は、高田に向けて出発、同日着。  
大手道と呉服町の四つ角の町年寄森又右衛門宅に陣を張った。  
この四つ角の町年寄は特別な家格で四つ角役と呼ばれていた。  
5月29日には高倉永結の本陣に行き、高倉、四條と今後の体制について協議。  
そこで副総督四條隆平は軍務を西園寺と高倉に委ね、自らは民政に専念することにした。これにより西園寺は諸事総督を布告した。  
総督仁和寺宮は7月10日に高田に着陣、森家に4日宿降したのち14日柏崎に宿降した。西園寺は高田に滞陣中も、柏崎や関原に出陣した。

6月13日、西園寺は高倉とともに極秘裏に柏崎に向けて出発。  
途中柿崎に泊まり、柏崎には翌日14日に到着。西園寺は柏崎では相沢彦兵衛宅を本陣とした。相沢本陣は北国街道沿いの大町にあった。  
新政府軍の本営は妙行寺(みょうぎょうじ)に置かれた。

6月16日には西園寺は柏崎を発ち関原・長岡に出陣。  
6月19日には柏崎に滞降、翌20日仁和寺宮は西園寺公望を越後口大参謀とし、高倉・四條は免職となった。そのことは西園寺から山縣・黒田にも伝えられた。  
山縣は西園寺公について、「仁和寺宮が総督となって以降西園寺は参謀となり、同じ職務(参謀)ではあるが、これまで我々の総督であったうえ、我々とは身分の異なる人であるので、その後も総督として待遇した」と請っている。  
6月下旬、西園寺は高田に滞陣したが、  
7月に入り再び柏崎に向かい2日に相沢本陣に著降した。陣容は70人程であった。  
着陣の際には大風雨となり、夜に入って雷雨となった。  
柏崎港陣ののち更に関原、長岡と転降している。  
5月2日、新政府軍は小千谷に諸藩会議所を置いた。小千谷は商業の盛んな町で、ここでも新政府軍に協力的な商人が少なからずいた。その日河井は近くの慈眼寺において新政府軍軍監の岩村精一郎と交渉に臨んだ。小千谷談判である。  
長岡藩は、摂田屋の光福寺に本陣を置き新政府軍に対抗。  
5月19日新政府軍は早朝、本大島から梅雨のため濁流の溢れる信濃川を渡り寺島(大手大橋の北付近)に上陸し長岡城下になだれ込んだ。  
西園寺はこの日、敦賀にあった。



21日に西園寺は敦賀を出港、  
 5月22日直江津今町に着き、長岡城落城の報告を受けたが、戦闘は続いた。  
 6月16日、西園寺公望は新政府軍の本営柏崎を発ち、長岡西方の関原に着陣。関原会議所では参謀山縣狂介と軍監岩村清一郎に会った。  
 17日は西妙寺に負傷者を慰問した。  
 18日にはこの間の戦闘に参じた諸藩に慰労の書簡を渡し、長岡に赴いて参謀黒田了介に会っている。  
 19日には関原で再度山縣狂介に会った。この間、山縣、黒田らと長岡攻略の軍議をこらしたと思われる。

7月に入ると新政府軍は関原を発ち、再び長岡に入った。この頃の西園寺の本陣は戦況により移っている。信濃川を挟んだ西岸では大島本町の庄屋長谷川家を本陣とした。現在の長生橋の南側である。  
 大島本陣から撃った砲弾は信濃川を挟み1.5キロほど先の長岡藩御用菓子商大和屋の蔵に届いたという。戊辰戦争の際には長岡藩の命で軍需品としてパンを製造し、また新政府軍の長州藩や加賀藩からもパンの注文を受けた店があった。

7月11日西園寺公望は信濃川を渡り、長岡城下に入り城のすぐ近くに会議所を置き、西園寺はその会議所に本陣を置いた。  
 神田ニノ町の縮屋五兵衛宅(現在の神田2丁目)  
 薩長諸藩はそれぞれ別に本陣を置いたが、山縣、黒田らの参謀はしばしば会議所に詰めた。

7月24日から25日にかけての深夜、突如長岡軍は長岡北方の八丁沖を渡り長岡に在った新政府軍を奇襲。不意を食らった新政府軍側はあわてて撤退をした。  
 山縣狂介は参謀・長三州に西園寺を関原まで退却させるよう命じ、西園寺は長三州・済崎直全を連れて野戦病院に行き傷病兵を避難させて、草生津の渡しから信濃川を渡り大島から関原、宮本へと退却した。  
 長岡市大黒町の北越戊辰戦争伝承館に展示の西園寺の書状は、25日午後7時頃に宮本から柏崎本営の壬生基修宛てに援軍を求めたもの。

小千谷に退却した山縣率いる新政府軍は各方面から猛烈な反撃を開始し、一旦長岡藩に取り戻された長岡は7月29日、再び新政府軍の手に落ちた。

8月に入ると新政府軍は長岡を完全に平定し、更に中越から下越へと軍を進めた。  
 8月1日、西園寺公望は関原を発ち大島に滞陣した。  
 5日大島を発ち長岡に移った。

その間新政府軍は8月2日に三条を、4日には加茂と新津を占領。また見附でも交戦し村松城を落した。これで新政府軍は中越全域を支配することとなった。8日まで西園寺は長岡に滞陣し、同日見附に向けて発ち、見附では松村陣屋を本陣とした。

9日には見附を発ち三条に入り、村役人の渋谷友助宅を本陣とした。陣容は50人ほどであった。

10日は三条に滞陣し、参謀山縣狂介の来訪を受けた。

12日には総督宮が三傑御坊(東掛所)に来陣した。

13日に西園寺公望は本法寺を訪れ、総督宮の本営として使えるか境内を見分した。

14日は総督宮の本陣を訪ね、三条を発ち新津の町年寄方を本陣とした。

この日は11人で止宿している。ここでも山縣狂介と会った。

15日に新津を発ち村松に着。城内家老宅に本陣を置き、村松藩の反主流・勤王派に擁立された藩主堀(奥田)貞次郎を五泉会議所に呼び、村松藩勤王藩士や大庄屋から8月6日に提出されていた弁解書に対し、村松藩の存続を裁可した。

仁和寺宮、西園寺公望は、各藩の恭順と民生の安定にのため、各地を巡覧。

9月7日、西園寺公望は会津に到着。22日、開城、24日に公望は若松城を検分。

10月5日、会津を平定し新発田に帰営した西園寺は総督仁和寺宮に戦争の終結を報告。このとき新政府軍の要請でイギリス公使パークスから派遣され傷病兵の治療にあたっていた医師ウィリアム・ウイリスも総督に拝謁した。

ウイリスは戦争における傷病兵の治療は新政府軍に留まらず、敵味方の区別なく旧幕府軍側の傷病者も治療すべきことを進言した。

10月9日、御親兵が会津口より新発田本営に引き上げると、総督仁和寺宮は慰労の宴をひらいた。

10月15日、仁和寺宮は西園寺公望に兵備を委任し江戸に向けて出発、西園寺は引き続き新発田に留まることとなった。

～ ここで初めて、長岡藩の降伏届を正式受理したらしいです。

西軍が受理延期か、それとも長岡藩の手続き不備か、は不明ですが、その報告が江戸に届き、ようやく敗戦が認められたということで、長岡勢はようやく長岡に戻ることが叶いました。

明くる明治2年正月5日、西園寺公望は3カ月滞在した新発田を出発し、新潟と群馬の県境三国峠を越えて東京に出府し、ここに西園寺公望の北越戊辰戦争は終結した。

～ 北越戊辰の役は確かに激戦であり、両軍の戦死者も会津戦に次ぐ多さと云われているが、この日記から察するに、西軍の本陣は巷間伝えられるところとは全く別で、西軍の横綱相撲であったことが見て取れます。

ただ、西園寺公望には、越後の民情、戦争の惨状は記憶に残り、その後の政治多忙の間に新潟を顧慮するに大きな影響があったと考えます。(春日・感想追記)

# 参考1. 近隣の武石弘三郎作のブロンズ像、大理191205春日

堀口九萬一、武石貞松	中之島・若宮社参道脇「友情の双像」
星野嘉保子（復元像）	草生津・唯敬寺本堂前
田村文四郎（オリジナル縮小像）	悠久山・堅正寺脇（オリジナル北越製紙内）
久須美秀三郎	越後線小島谷駅前
久須美東馬	弥彦公園内 瓢箪池の傍
池原康造（復元像）	新潟市・新潟大学医学部池原記念館前
竹山屯（大理石像）	新潟市・新潟大学医学部附属図書館三階
新津恒吉（復元像）	新潟市・りゅーとぴあ入口前
狛犬（本人による再製作）	中之島・若宮社（初代の狛犬は戦時供出）
老母	県立近代美術館所蔵（お嬢さんから寄贈）
今井藤七（本人による縮小像）	県立近代美術館所蔵
裸婦像レリーフ（大理石像）	県立近代美術館所蔵

## 武石弘三郎（1877年-1963年）の関連年譜

1901年（明治34年）彫塑科卒業。その後、ベルギーに8年間・滞在し、その間にブリュセル国立美術学校に学んだ。

1909年（明治42年）帰国。同郷の石黒忠恵の知遇を得、その関係で松本順・石黒忠恵（ただのり 陸軍軍医）像や森鷗外像の制作を手がけた。

1919年（大正8年）内藤久寛像を製作（日本石油設立者のひとり。石地出身）  
田村文四郎像の製作は、その後と思われます。

1920年（大正9年）山田又七像を製作

1920年（大正9年）石黒忠恵像を製作

1926年（大正15年）竹山屯像を製作

1926年（大正15年）今井藤七像を製作（北海道の老舗百貨店丸井今井の創業者、三条出身）

参考2. 西園寺公望に関わる武石弘三郎作 ▲ オリジナルは戦時金属供出で消

堀口久萬一 像  
武石貞松 像

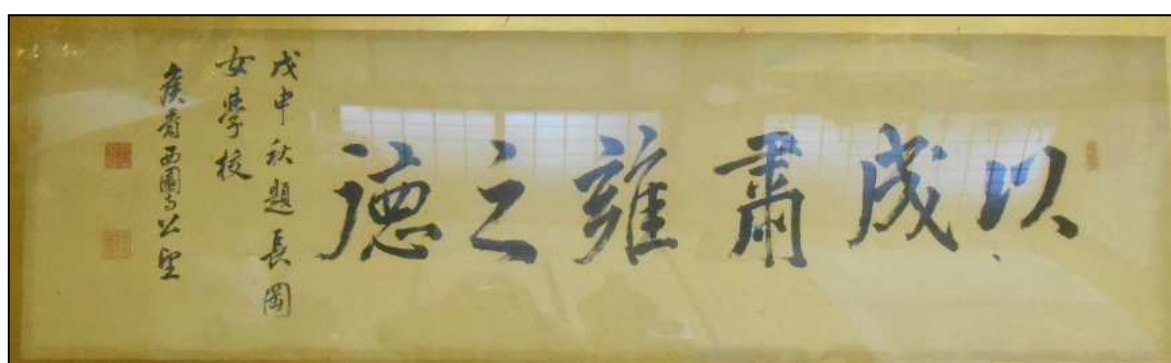
山縣有朋  
高橋竹之介

西園寺公望 像

竹山屯 像

長谷川泰 像

三島億二郎  
河井継之助



星野嘉保子 像

星野嘉保子碑 拓本  
以成肅雍之德

